

まえがき

第1章 語の成り立ち 10

第1節	ことばと音	10
1	言語における音	10
2	語	10
3	拍	11
4	アクセント	11
第2節	ことばと意味	12
1	意味	12
2	意味と音の合体	12
3	言語記号の性質	13
4	意味の三角形	14
5	ことばと指示物との意図的ずらし	14
6	婉曲・皮肉・諷刺	15
第3節	語構成	16
1	語の結合	16
2	語構成から見た語の分類	17
3	語基と接辞	17
4	合成語の分類	18
5	派生語の性質	19
6	複合語の性質	19
7	漢語の語構成	20
8	連語と慣用句	21
第4節	語形成	22
1	動的なしくみ	22
2	新語の形成	22
3	組み合わせによる語の形成	23
4	複合動詞の二つのタイプ	24

5	臨時一語	25
6	略語	25
7	異分析	27
第5節	語源と語史	28
1	語源	28
2	語史	29
3	ことばの由来	29
4	忌詞	30

第2章 語の分類 32

第1節	使い方による分類	32
1	話し言葉と書き言葉	32
2	雅語・俗語	33
3	使用語彙と理解語彙	34
4	名称と呼称	34
第2節	文法的機能による分類	36
1	品詞による分類	36
2	名詞の分類	36
3	動詞の分類	38
4	形容詞の分類	39
5	副詞の分類	39
第3節	出自による分類	40
1	語種	40
2	和語	40
3	漢語	41
4	外来語	42
5	混種語	42

第1節	ことばの体系.....	44
1	語彙体系.....	44
2	語彙の総体をとらえる体系.....	44
3	語彙の部分をとらえる体系.....	45
4	語彙体系と世界のとらえ方.....	47
第2節	親族語彙.....	48
1	親族呼称と親族名称.....	48
2	親族内での呼び方.....	49
3	親族名称の歴史.....	49
第3節	色彩語彙.....	50
1	基本色彩語.....	50
2	日本語の色彩語.....	50
3	古代の色彩語.....	51
4	色彩語のイメージ.....	51
第4節	身体語彙.....	52
1	日本語の身体語彙.....	52
2	身体語彙の歴史.....	52
3	西洋医学の導入による新しい語彙.....	53
4	身体語彙に見る専門語と日常語.....	53
第5節	感情語彙.....	54
1	感情語彙とは.....	54
2	形容詞表現と動詞表現.....	54
3	感情語彙の歴史.....	54
4	感情語の意味変化.....	55
第6節	数詞と助数詞.....	56
1	数詞とは.....	56
2	本数詞の2種類.....	56
3	数詞の2種類.....	57
4	数量詞の使い方.....	57

5	助数詞とは.....	58
6	助数詞の語種.....	59
7	新しい助数詞.....	59
第7節	オノマトペ (擬音語・擬態語).....	60
1	オノマトペとは.....	60
2	オノマトペの分類.....	60
3	オノマトペの規則的形態.....	62
4	音と意味の関係.....	62
5	オノマトペの由来と派生.....	62
6	オノマトペの品詞と使い方.....	63

第1節	ことばの意味.....	64
1	意味とは何か.....	64
2	意味の色々.....	65
第2節	意味関係.....	68
1	意味関係と意味の体系.....	68
2	同義語 (等質関係).....	68
3	類義語 (類似関係).....	69
4	反義語 (対義関係).....	70
5	上位語・下位語 (階層関係・包含関係).....	71
第3節	類義語.....	72
1	類義語とは.....	72
2	類義語の違い.....	72
第4節	反義語・対照語.....	74
1	反義語とは.....	74
2	反義語と対照語.....	74
3	形容詞の反義語.....	75
4	名詞の反義語.....	76
5	動詞の反義語.....	77

6 反義関係の非対称性.....	77
第5節 多義語	78
1 多義語とは.....	78
2 同音異義語と多義語.....	78
3 多義語の発生過程.....	80

第5章 **ことばの変化**..... 82

第1節 意味変化	82
1 意味変化と多義語.....	82
2 なぜ意味変化が起こるか.....	82
3 意味変化のパターン.....	83
第2節 語形変化	86
1 語形変化とその要因.....	86
2 音の変化.....	87
3 音の脱落.....	87
4 音の添加.....	88
5 音の融合（相互同化）.....	89
6 その他.....	89
第3節 語の交代	90
1 言い換え.....	90
2 語彙の史的変遷.....	92

第6章 **ことばの変遷**..... 94

第1節 語種の変遷	94
1 日本語の構成.....	94
2 語種の推移.....	95
3 近代以降の語種分布.....	96
第2節 和語の変遷	98

1 和語の増加.....	98
2 語形の変化.....	98
3 和語の拡張.....	101
第3節 漢語の変遷	105
1 漢語の伝来と借用.....	106
2 漢語と字音.....	106
3 漢語の日本的変化.....	109
4 和製漢語の形成.....	111
5 近代新漢語の成立.....	114
第4節 外来語の変遷	119
1 外国語か外来語か.....	119
2 外来語受容の歴史.....	120
3 外来語の役割.....	123
4 外来語の形態と表記.....	123
5 和製外来語.....	124
6 外来語の意味的補完.....	125

第7章 **ことばの位相**..... 126

第1節 地域とことば	126
1 方言と共通語.....	126
2 日本語方言の分布類型.....	126
3 共通語化の流れ.....	127
4 新しい言語の地域差.....	128
第2節 ジェンダーとことば	130
1 日本語の性差.....	130
2 女房詞.....	130
3 言葉遣いの男女差と社会的要因.....	131
4 近代の女性語・男性語.....	131
5 性差と語彙.....	132
6 ジェンダー意識の高まり.....	132

7	ジェンダーを反映する語彙	133
第3節	年齢とことば	134
1	幼児語と語彙量の発達	134
2	若者言葉	134
3	老人語	135
4	年齢と言葉遣いの意識	135
第4節	敬語のことば	136
1	敬語とは	136
2	敬語の3分類	136
3	敬語の5分類	137
4	軽卑語（卑罵語・侮蔑語）と尊大語	139
第5節	手紙のことば	140
1	手紙	140
2	手紙の形式と用語	140

7	隠語の造語法	150
8	集団語と隠語の位置づけ	151
9	隠語と忌詞	151
第3節	命名	152
1	命名とは	152
2	命名の生成過程	152
3	普通名詞の命名パターン	152
4	固有名詞の命名パターン	153
第4節	文芸のことば	154
1	歌語	154
2	季語	154
3	枕詞	155
4	歌枕	156
5	掛詞	156
6	縁語	157
第5節	辞書	158
1	辞書とは	158
2	辞書の性格	158
3	辞書の種類	159
4	辞書の情報	159
5	見出しの形式	160
6	見出しの配列	160
7	辞書の規模	161
第6節	名数・ことわざ・故事成句・四字熟語	162
1	名数	162
2	ことわざ	163
3	故事成句・四字熟語	164

主要参考文献	166
事項・人名・書名索引	169
執筆担当者一覧	175

第1節	新語・流行語	144
1	新語とは	144
2	新語発生の理由	144
3	新語の生成パターン	145
4	流行語とは	146
5	流行語の発生理由	146
6	廃語・死語	147
第2節	集団語	148
1	集団語とは	148
2	職業語	148
3	職業語の性格	148
4	専門語	149
5	隠語とは	149
6	隠語の性格	150

語の分類

第1節 使い方による分類

1 話し言葉と書き言葉

「話し言葉」は日常的な生活の中で会話に用いられる言語のことで、これを音声言語ともいう。これに対して、「書き言葉」は文字によって書き記す場合に用いられる言語のことで、これを書記言語ともいう。言語の伝達様式の違いに基づく名称である。

話し言葉では「チャー（まずい）」という語を用いても、書き言葉では用いにくい。また、話し言葉では「はらいた（腹痛）」と言うが、書き言葉では普通「ふくつう」を用いる。このように、話し言葉と書き言葉とでは使用する語に違いが見られるのである。

また、話し言葉を「口語」、書き言葉を「文語」と呼ぶ場合もあるが、こ

れは主として言葉遣い、文章のスタイルに基づく場合に用いられるものである。前者は口頭で用いられる言葉遣い、後者は文字で書き記す場合の言葉遣いをさす。ただし、文語は一般に平安時代の言語に基づき、これに多少の修正を加えた書き言葉という意味で用いられ、書き言葉とはいっても近代以前のものを指すことが多い。

2 雅語・俗語

ことばには〈好ましい／厭わしい〉〈新鮮である／古めかしい〉〈親しみやすい／親しみにくい〉〈改まっている／くだけている〉など、さまざまなイメージが伴っているものもある。

江戸時代、国学者や歌人などが平安

時代の和文語に用いられた和語（やまとことば）を、風雅なことばとして尊重した。これを「雅言」などと称した。そのような、優雅で洗練されたイメージを伴う語を今日でも「雅語」と呼ぶことがある。その「雅言」に対して、世間で一般に用いられていることばを「俚言^{りげん}」と言った。それぞれの土地の訛ったことばの意でも用いられ、「俗言」とも呼ばれた。

日常会話で用いるくだけたことばを「俗語」という。特に、教養のない、品性に欠けた言い方で、文章語や改まった場面では使用を避けるべきものというニュアンスで用いられることが多い。「むかつく」「きれる」「まじ」などの類である。隠語が特定の言語集団

■書き言葉の成立

話し言葉はすべての自然言語に存在するが、言語によっては書き言葉がないこともある。書き言葉は文字で表記されることで初めて成立するものであるから、文字を持たない言語に書き言葉は成立しない。たとえば、アイヌ語はラテン文字や仮名で記された記録が近代以前にも残っているが、文字体系を有していなかったため、言語の体系的記述は明治以降のことである。

ただし、書き言葉が全く別の言語体系によって用いられる場合もある。たとえば、中世ヨーロッパにおけるラテン語、近世以前の日本・朝鮮・ベトナムなどの東アジアにおける漢文（中国語）などがそれである。

■書き言葉の規範性

話し言葉はコミュニケーションの場に依存することが多く、省略や規範からの逸脱なども少なくないことから、ふつう書き言葉が規範性をもつ。日本語の場合、平安時代まではこの両者にほとんど違いがなかったが、鎌倉時代になると、平安時代の言語を規範とする書き言葉（文語）が用いられるようになった。話し言葉が言語の変化を反映するのに対して、書き言葉はその後ほとんど変化せず、その隔たりは時とともに基だしくなっていく。1887年以降の言文一致運動によって話し言葉に基づく書き言葉が確立されるようになり、次第に口語体がふつうに用いられるようになった。

■ことばとその使い手

ことばの使われ方はすべての日本語話者において一様ではなく、性・年齢・地域・階級・職業などの違いによって、さまざまな様相を呈する。

たとえば、性に関しては、女性らしい柔らかな感じを伴う女性性語、年齢については、可愛らしさを反映させようとする幼児語、地域の差については、方言などがあげられる。また、職業によっては、その専門性、そして、職場における符牒や、接客上での必要性などによって、独特な表現が用いられることもある。さらに、学生語や隠語など、集団の連帯感や仲間意識に基づくと見られる心理的要因などによるものなどもある。

■雅語の例

あゆむ〈歩く〉
あがなう〈買う〉
いざなう〈誘う〉
いつくしむ〈可愛がる・哀れむ〉
さやぐ〈ざわざわと鳴る〉
つどう〈集まる〉
ぬれそぼつ〈びしょ濡れになる〉
はぐくむ〈育てる〉
いとけない〈幼い〉
まばゆい〈眩しい〉
あした〈朝〉
うたげ〈宴会〉
うたかた〈泡〉
しじま〈静寂〉
たまゆら〈暫くの間〉
ほむら〈永遠〉
ほむら〈災〉
みなも〈水面〉
ゆうげ〈夕飯〉

■「俗語」の歴史

正式な言語とは認められない言語体系は一般に「俗語」と呼ばれた。中世ヨーロッパではラテン語が公用語であったため、話し言葉で日常的に用いる言語、たとえば、イタリア語などは俗語として扱われた。ダンテ（1265～1321）の『神曲』は当時としては珍しくイタリア語（トスカナ地方の方言）で著されたもので、俗語を用いた文学作品の先駆けであった。

日本でも江戸時代まで文語もしくは漢文が公式に用いられたため、話し言葉は「俚言」「俗言」と称された。明治期においては、「俗語」はふつう（口語）の意で用いられる用語であった。

■異なり語数と延べ語数

ある言語資料の中で、同一の単語が何度用いられていても、これを一語とし、その資料全体で異なる単語がいくつあるかを数えた数を「異なり語数」という。これに対して、言語資料の中で、単語がいくつ用いられているか、重複するものもすべて一つずつ数えた総数のことを「延べ語数」という。

たとえば、「雨雨降れ降れ」は語に区切ると、「雨／雨／降れ／降れ」となり、「雨」が2度、「降る」が2度用いられていて、延べ語数では4となる。他方、「雨」と「降る」の2語しか使われていないから、異なり語数は2となる。

さまざまな語彙

第1節 ことばの体系

1 語彙体系

語彙は語が集合したものであるが、その集合の中では個々の語がばらばらに存在しているのではない。ある語と別の語とが一定の関係で張り合っ集合を構成している。この張り合い関係のことを語彙体系という。語彙体系のとりえ方は規模の大小に応じていくつ

かの考え方がある。

2 語彙の総体をとらえる体系

日本語の語彙の総体をとらえる語彙体系は、語彙を意味によって分類したシソーラス (thesaurus 意味分類体辞書) を作ってとらえるのが一般的である。日本語のシソーラスの代表的なものひとつに、国立国語研究所編『分

表3-1 国立国語研究所編『分類語彙表—増補改訂版—』の分類項目

1 体の類	2 用の類	3 相の類
1.1 抽象的關係	2.1 抽象的關係	3.1 抽象的關係
1.10 事柄 1.1000 事柄	2.10 真偽	3.10 真偽
1.1010 こそあど・他 1.1030 真偽・是非 1.1040 本体・代理	2.1010 こそあど・他 2.1030 真偽・是非	3.1010 こそあど・他 3.1030 真偽・是非 3.1040 本体・代理
1.11 類 1.1100 類・例 1.1101 等級・系列 1.1110 関係 1.1111 元末 1.1112 因果 (以下略)	2.11 類 2.1110 関係 2.1111 本末 2.1112 因果 (以下略)	3.11 類 3.1101 等級・系列 3.1110 関係 3.1112 因果 (以下略)

■国立国語研究所編『分類語彙表—増補改訂版—』の例
 ・1.1110 関係
 01 関係 対当 無関係 ノー
 タッチ 没交渉

01 かわる かわり合う
 係る 掛かり合う 関係する
 関する 縁がある 関係付け
 る 関連する 連関する リ
 ンクする 相関する あずか
 る [国政に〜] かかずらう
 関与・干与する つながる
 つなぐ つなげる 連係する
 連なる 連続する 兼ねる
 02 ーれる ーられる ーせ
 る・ーす ーさせる・ーさ
 す ーしめる [言わ〜] ー
 掛ける [話し〜・働き〜]

・3.1110 関係
 01 無関係 無縁 縁もゆかり
 もない 没交渉 不仲
 02 直接 間接 直接的 間接
 的 直に 直接的 間接
 に 直直 直 お構いなし

類語彙表』(1964年初版、2004年増補改訂版)がある(表3-1)。語彙全体をまず、1「体の類」(名詞類)、2「用の類」(動詞類)、3「相の類」(形容詞類)という品詞の観点と、1「抽象的關係」、2「人間活動の主体」、3「人間活動—精神および行為」、4「生産物および用具」、5「自然物および自然現象」という意味分野の観点とで分け、この二つの観点をかけ合わせることで分類枠を設けている。各分類枠の下位に、「1.1 体の類 抽象的關係」であれば、「1.10 事柄」「1.11 類」「1.12 存在」「1.13 様相」「1.14 力」「1.15 作用」「1.16 時間」「1.17 空間」「1.18 形」「1.19 量」といった中項目を設け、さらにその中を細分し、たとえば「1.11

類」の中に、「1.1100 類・例」「1.1101 等級・系列」「1.1110 関係」などと小分類している。こうして分けられた小分類に、増補改訂版では約8万語が割り振られている。表3-1の下段には「関係」という小分類について、体の類・用の類・相の類それぞれの冒頭を示した。また、増補改訂版で各分類に配分された語数は表3-2、3-3の通りである。

3 語彙の部分をとらえる体系

(1)上位語・下位語

語彙の一部を取り出して体系をとらえることもできる。この場合は、語同士の意味の関係に着目することになる。たとえば、「いわし」「さば」「たい」

表3-2 国立国語研究所編『分類語彙表—増補改訂版—』の部門別の語数

	1 体の類	2 用の類	3 相の類	4 その他の語類	計
1 抽象的關係	15351	8002	4177	—	27530
2 人間活動の主体	8585	—	—	—	8585
3 人間活動—精神および行為	23941	14070	4025	—	42036
4 生産物および用具	9672	—	—	—	9672
5 自然物および自然現象	9465	1690	1186	—	12341
6 その他の語類	—	—	—	906	906
計	67014	23762	9388	906	101070

表3-3 同書の「1 抽象的關係」の中項目別の語数

	1 体の類	2 用の類	3 相の類	計
10 事柄	430	24	189	643
11 類	1039	377	262	1678
12 存在	739	944	147	1830
13 様相	1323	417	948	2688
14 力	247	33	105	385
15 作用	3670	5764	482	9916
16 時間	2498	288	738	3524
17 空間	1830	77	38	1945
18 形	787	0	135	922
19 量	2788	78	1133	3999
計	15351	8002	4177	27530

[出典] 国立国語研究所編『分類語彙表—増補改訂版—』(書籍)をもとにしたデータベースVer.1.0による

1 反義語とは

「大きい／小さい」「上／下」「開ける／閉める」のような語を反義語（反対語）と呼ぶ。反義語は、意味が逆のことばであるが、語のもつ意味特徴のすべてにおいて逆なのではなく、そのうちの一つが逆であると考えられる。

たとえば「父」は<男性><一世代上><直系>という意味特徴の束であると考え、その逆は<女性><一世代下><傍系>という意味特徴の束となり、それは「姪」を指すことになってしまう。だが「父」と「姪」が反

対語であるというのは、おそらく日本語の直感に反するだろう。「父」の反義語は、「男性」を逆にした場合の「母」か、「一世代上」を逆にした「息子」が一般的である。

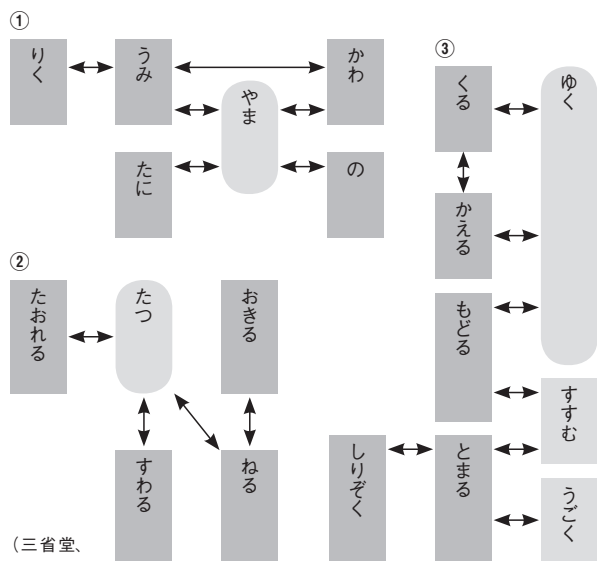
2 反義語と対照語

反義語は基本的に二語の関係であるが、対照語は三語以上の関係であり、名詞に多い（図4-16,4-17）。

たとえば方位を表す「東・西・南・北」、季節を表す「春・夏・秋・冬」、曜日を表す「月曜日・火曜日・水曜日・木曜日・金曜日・土曜日・日曜日」、

図4-16 反義語・対照語 (1)

語と語間の意味の対立は安定したものではなく、観点によって、さまざまな対立が生じてくることも少なくない。①は「やま」を中心につぎつぎに浮かび上がってくる語彙の結びつきの様子を示したものであり、②は「たつ」を中心に展開される反義語の結びつきを示したものである。さらに、③の「ゆく」をめぐる反義語の結びつきのように、複雑なものもある。



【出典】 松村明編『大辞林 第三版』（三省堂、2006）をもとに作成

感情を表す「喜・怒・哀・楽」などには、対照語の関係がある。

3 形容詞の反義語

形容詞には反義語をもつものが多い。ある基準について、その程度が逆になることを表すペアがあり、両極にある語の間には無限の中間段階が連続的に存在する。

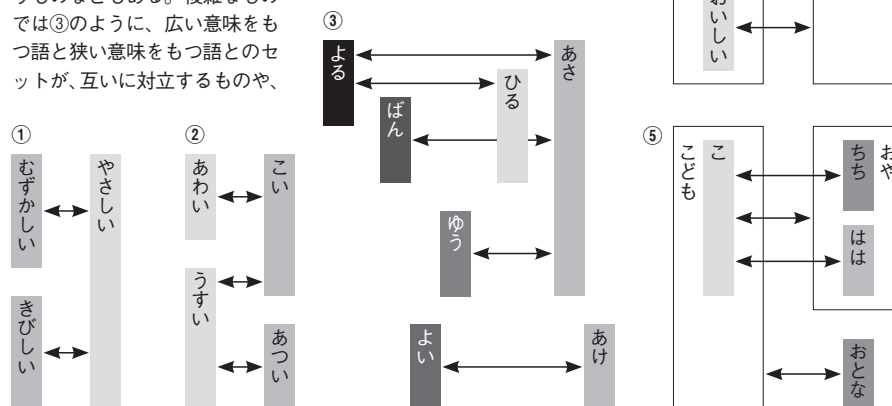
- ・高い／安い（値段）
- ・高い／低い（高度）
- ・暑い／寒い（気温）
- ・熱い／冷たい（物質）
- ・重い／軽い（重量）
- ・遠い／近い（距離）
- ・多い／少ない（数量）
- ・広い／狭い（面積）

「あつい／さむい」は気温の高低の程度が甚だしく不快であることを表すのに対し、「あたたかい／すずしい」はその程度が穏やかで快適であることを示す。「熱い／冷たい」にも「温かい／ぬるい」という、程度がそれほど甚だしくない段階がある。「あつい」には「暑い・熱い」のほかに「厚い」があり、その反義語は「薄い」である。このように「あつい」は多義語であり、表記において異なる漢字が使われ、反義語もそれぞれ異なる。一方で「早い／遅い（時間）」と「速い／遅い（スピード）」のように、片方の表記のみが異なる場合もある。また「忙しい／暇だ」「きれいだ／きたない」のように、形容詞と形容動詞のペアもある。

図4-17 反義語・対照語 (2)

①のように一对多の対立によるもの、あるいは②のように複数の語のセット同士が対立しあうものなどもある。複雑なものでは③のように、広い意味をもつ語と狭い意味をもつ語とのセットが、互いに対立するものや、

④⑤のように、大きな対立の中に、小さな対立を含むものなどもある。



【出典】 松村明編『大辞林 第三版』（三省堂、2006）をもとに作成

ことばの変化

第1節 意味変化

1 意味変化と多義語

語の意味は歴史的に変化しないものもあるが、本来の意味から派生して別の意味を生じることもある。これを「意味変化」という。

意味が変化した結果、新しい意味だけで用いられることもあるが、古くからの意味に加えて、新しい意味でも用

いられると、語の意味が広がり多義語となる(図5-1, 5-2)。

2 なぜ意味変化が起こるか

「うまい」は〈美味である〉という味覚を表す語であるが、これが「歌がうまい」「うまい具合に」というように用いられるのは、味覚に関しての満足感が別の対象に向けられたことによ

■ 語史と語彙史

語の歴史(語史)を個別に記述する場合、語は音声形式と意味との結合したものであるから、音声面、すなわち語の形態に即して、その語形がどのように変化してきたかを考察する立場と、ある語の意味がどのように変化してきたかを考察する立場とがある。さらに、ある意味を表すことばとして、歴史的にどのような語が用いられたかを考察する立場もある。

また、語彙史では、ある意味分野にはどのような語彙があり、それが歴史的にどのように変化してきたか、それぞれの時代にどのような特徴があるかということなどを扱う。

■ 意味変化の一要因

意味は使用範囲の拡大(縮小)による場合のほかにもさまざまなケースが考えられる。

たとえば、「おおげさ(大袈裟)」が〈誇張しているさま〉の意となるのは「おおけなし(おほけなし)」の語幹「おおけ」に接尾語「さ」が付いたものに由来する。「おおけなし」は〈身分・能力などから見て、態度や振る舞いが出過ぎているさま〉を表し、この「おおけなさ」と「おおげさ(大袈裟)」との音や意味の類似によって「大袈裟」が生じたのであろう。

このように、同音・類音の語や、意味が類似している語を介させる場合にも意味の変化が起こりやすい。

■ 語義の「ゆれ」

文化庁では2008年3月に「国語に関する世論調査」を実施し、1975名から回答を得た。その中に「ことばの意味」に関する項目があり、「さわり」「煮詰まる」「憮然」などのことばを取りあげている。

本来の意味は、「さわり」は(ア)、「煮詰まる」は(イ)、「憮然」は(ア)である。

図5-2(84頁下段)を見ると、「煮詰まる」は年輩者に比べると、若い世代では本来の意味とは別の意味で解釈されていることがわかる。これは「煮詰まる」という語の意味が変化する兆しを示していると言える。

る。つまり〈味がうまい〉から〈歌がうまい〉〈事態がうまい〉というように、〈うまい〉と感ずる対象を広げて用いることが定着し、それによって、〈上手だ〉〈都合がいい〉という意味でも用いられて、多義化することになる。その使用範囲が本来の領域を逸脱して拡大(もしくは縮小)する際に意味変化が生じると言える。

ただ、意味が拡大したという意識はその当初において明確にあるわけではなく、使える範囲が広がったというだけである。しかし、同じような意味で、「上手だ」「好都合だ」など別の語が出現すると、対となる類義関係の語との間で、同一の語の内部で意味用法との異同が意識され、別の意味で用いるという自覚が生じることになる。

また、「おいしい」ということばが

新語として使われだすと、「うまい」との関係で「おいしい」が上品で丁寧なことばであると感じられるようになり、主として女性が用いることになった。すなわち、対となる存在によって初めて、ことばの意味が限定されてくるといった性質をもっているのである。概念的な意味だけではなく、語感やニュアンスなども意味の変化には含まれる。

3 意味変化のパターン

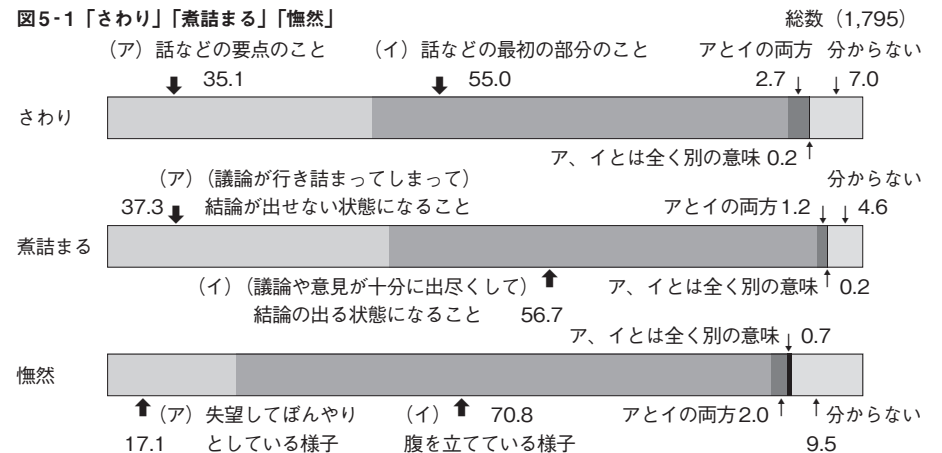
意味変化の主な類型を次に示す。

① 転移(ある事物に関して、その内在的性質や関係の及んだ事物などの意に転じて用いられる)

「口」〈手に持つもの〉→〈手札〉
〈手で書いたもの〉→〈筆跡・書風〉

② 意味の類似(比喩的転用)

(1) 形態の類似



【出典】「平成19年度国語に関する世論調査」(文化庁、2008)をもとに作成

(3)新出語…広く知られていなかった既存の語を、意味を変えずに使用することをいう。

のような、三つが考えられる。

4 流行語とは

ある時点で社会の広い範囲で使用され、知られるようになった語を流行語という。そのため流行語は新語と重なる場合もあるが、必ずしも新語であるとは限らず、既存の語がある時点で注目を浴びて流行語となることも少なくない。その時代の世相や風俗を表すことから世相語、風俗語などと呼ばれることもある。

流行語は一般に寿命が短く、出入りも激しいが、一部には長く使われて一

般語化するものもないわけではない(表8-1,図8-2)。

5 流行語の発生理由

人々に知られた語のすべてが流行語化するわけではない。流行語の発生理由も新語同様に分けてみる。

(1)社会的理由…古くは、劇場、寄席、映画などを通じて大衆が親しく接した語が流行語となることがあった。近年は、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、などのマスメディアによって一般社会に広がる例が多い。また、戦時中の政府が行なったスローガンのような例もある。

(2)心理的理由…影響力の大きい芸能人、著名人の発言の一部を大衆がま

ねたり、共感を覚えて使用したりすることで流行語となることもある。そのため、流行語は必ずしも語とは限らず、句や文の形で流通することも珍しくない。

(3)言語的理由…語形や意味などのもつ新しさ、奇抜さを大衆が支持して会話に使い、その語を使用すること自体を楽しむことで広がる場合がある。これは(1)(2)とも密接な関係がある。

6 廃語・死語

新語の発生により使用されなくなったり、事物自体の消滅によって使用されなくなったりする語がある。また、その事物に対する考え方が変わり、使

わなくなった語もある。これらを廃語または死語という。俗に、流行が去って忘れられた語を死語というが、廃語や死語の認定は容易にできない。言語学では、日常的話者が存在しなくなった言語を死語という。サンスクリット語やラテン語など、日常的話者はいないが、文献による学習者が存在する言語や、ヒッタイト語やトカラ語など、発掘によって過去の存在が判明した言語もある。

図8-2 大学生の流行語認知度

右のグラフは、1984～2009年「日本新語・流行語大賞」(自由国民社/ユーキャン主催)の選考にノミネートされた流行語を、大学生がどの程度知っているかについてアンケートした結果である。アンケートは東京都内・大阪府内の大学生807名を対象とし、2010年9～10月に木村義之が行った。

